

より実感をもって「食」を捉える ～単元を通して「人の取組」から社会的事象を学ぶ～

梶山雄太 | 新潟市立上所小学校

1. 地域の材を教材化する

新潟市江南区にある坂井ファームクリエイト(有)の取組を教材化しました。坂井ファームクリエイトは、小松菜やねぎなどを栽培する生産者であり、直売所も経営しています。日本が直面している食料生産課題は様々であり、前単元の農業や水産業に共通する部分も多いです。例えば、若手の人材不足や自給率の低下、フードマイレージの高騰などが挙げられます。その課題に対する取組を行っている生産者を教材化する価値は、非常に大きいと思いました。

生産者の視点から「食」について考えることで、消費者として意識することやできることを実感的に学べると考え、次のような指導計画を作成しました。

時	内容
①	日本の食料生産の現状を知る
②	日本の食料生産課題を解決するにはどうすればよいか考える
③	日本の食料生産課題に対する取組をしている身近な生産者の存在を知る
④	生産の工夫について知る
⑤	輸送の工夫について知る
⑥	加工と販売の仕方について知る
⑦	事業の工夫について知る
⑧	日本の食料生産課題を解決するためにどうすればよいか考える
⑨	自分たちができることを考え実践する

2. 生の「声」「味」で実感を高める

単元を通して生産者の視点で学習していくが、児童がより実感をもって学べるように「生」にこだわりました。

「声」については、生産者をゲストティーチャーとして招き、生産者の想いを直接聞く場を設定しました。また、時間が設定できない部分は事前に動画を撮影することで、児童がタブレット端末で確認できるようにしました。

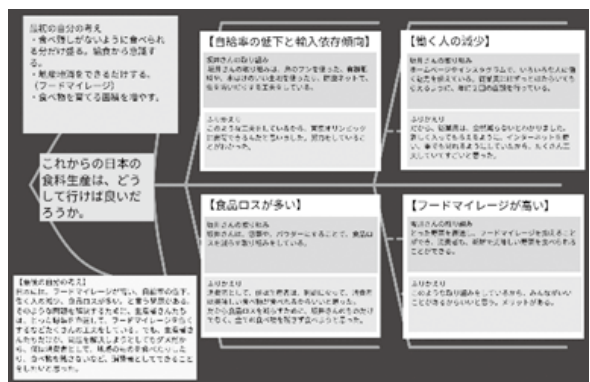
「味」については、陳列できない小松菜を調理し

たメンチカツを食べさせていただいたり、栄養教諭と連携し、給食で小松菜のおひたしを出していただいたりして、生産者が行っている工夫を舌でも感じることができるようにしました。



3. 単元振り返りシートで可視化する

学びの連続性や繋がりを生むために、単元振り返りシートを作成し、使用しました。ロイロノート¹のフィッシュボーンチャートを使い、頭にあたる部分には単元を貫く問いを、骨にあたる部分には毎時間の振り返りを記入させました。毎時間獲得した知識や気づきを1枚のシートにまとめていくことで、学習が積み重なっていくことを児童に感じてほしいと考えました。また、単元を貫く問いを毎時間の終末に見ることで、常に自らが立てた問いに立ち返ることができました。



¹ 株式会社Loiloが提供している授業支援アプリ